

「定規、ミニマムになる」

— 2 稿 —

2026/10/11

雨森 れに

〈人物表〉

小崎 泰智

(17)

関節ごと30センチ伸ばせる身体強化者

富田 耀

(17)

筋肉を強化できる身体強化者

西田 友佳

(26)

アパートに暮らす主婦

赤ん坊

1. 住宅街・道（朝）

路駐車が目立つ狭い路地。

快晴で、どの家も洗濯物や布団を干している。

登校中の小崎泰智（17）、腕を突き出す。

肘から手首にかけてググッと30センチ伸びる。それ以上伸びず、不満げ。

後ろから走ってくる富田耀（17）、車より早い。

耀 「定規、おは！」

と、泰智の背中を叩く。

泰智、数メートル吹っ飛び、転がる。

耀 「わーい！」

耀、走り去る。

泰智、大きなため息。

2. 高校・教室・前（朝）

生徒たちのがやがやとした声。

クラスプレートには「身体強化組」とある。

3. 高校・教室・内（朝）

始業前。生徒たちが能力を披露している。

耀、その様子を動画に収めている。

泰智、読書中。A4判の図鑑『レスキュー大全』。

耀 「次、定規！」

泰智、嫌そうな顔。

泰智 「その呼び方やめてよ」

耀 「いいじゃん。ほら（バスケットボールを見せて）いつものゴール作ってよ」

クラスの視線が泰智に集まる。

泰智、仕方なさげに立ち上がる。

泰智 「顔は映さないでよ」

と、両腕を伸ばす。

肩、上腕、前腕の順に30センチずつ伸ばし、両手で輪を作る。

耀 「完璧じゃん」

耀、教室の端に移動。

近くの生徒にスマホを渡す。

耀 「よろしく」

耀、助走をつけ、渾身のダンクシュート。

泰智、直前で避ける。

耀、勢い余って机に突っ込む。机が壊れる。

泰智、腕を元に戻す。

生徒たちの笑い声。

耀 「それはひどくね!？」

泰智、読書に戻っている。

読んでいるのは高所救助についてのページ。

耀 「最近、そればかり読んでんな」

泰智 「関係ないでしょ」

泰智、ページをめくる。

4. 高校・屋上（昼）

昼休み。泰智と耀は弁当を食べている。

サイレンの音。

ふたりがフェンス越しに見ると、住宅街から黒煙が

あがっている。

耀 「俺らの通学路じゃん!」

耀、泰智の腕を掴む。

泰智 「え？」

耀 「身体強化者の責任ってやつ!」

耀、泰智を担ぐ。

泰智 「待って。まず先生に——」

耀、凄まじい速さで駆けていく。

泰智の悲鳴。

5. 通学路（昼）

消防車が路駐車のせいで、現場へ向かえないでいる。

消防隊員が車の持ち主を探しながら、住民に避難を

呼びかけている。

耀、隙間を縫うように走っていく。

6. アパート・前（昼）

三階建てアパート。一階から炎が噴き出している。
住民たちが離れた場所へ避難している。野次馬はス
マホで撮影している。

三階のバルコニーに西田友佳（26）。腕に赤ん坊を
抱き、助けを求めている。

友佳 「だれか！ 助けてください！」

赤ん坊の泣き声。

野次馬、スマホを少し高く掲げる。

泰智、それを見て怒りの表情。

泰智 「なんでそれ撮るんだよ」

耀、泰智を肘でついて、

耀 「なあ、あれ」

アパートの側面。小窓がなく、火の手が弱い。
そこに排水管がまっすぐ三階まで伸びている。

耀 「いけそうだな」

泰智 「待って、あれって……」

耀、走り出す。

7. アパート・横（昼）

耀、壁を蹴って排水管を掴む。

耀 「あっちいいいい」

耀、転がる。

野次馬の何人かが、スマホを向ける。

泰智 「撮るなよ！」

泰智、耀に駆け寄る。

泰智 「別の方法を考えないと」

一階から爆発音。

赤ん坊の泣き声が大きくなる。

ふたり、泣き声のする方向を見る。

強くなる火の粉。

泰智、思わず両手を伸ばしかけ、やめる。

耀 「もしかして、届く？」

泰智 「体幹を保てるのは、たぶん、二階まで」

泰智、自分の手を見る。

泰智 「それに、無理したら戻った時に縮むんだ」

と、拳を握る。

耀 「マジかよ……」

耀、頭を掻きむしる。

泰智、周囲を見渡す。

布団を干している家が多い。

× × ×

『レスキュー大全』の高所救助のページ。

高所から落ちる人をクッションで受け止める写真。

× × ×

泰智 「……落ちる場所を作る」

8. 住宅街（昼）

泰智、バケツリレーを始めた近隣住民らに、

泰智 「布団を貸してください！ 落下の衝撃を少しでも減らしたいんです！」

住民1 「でも三階からじゃ……」

住民1 「でも三階からじゃ……」

泰智 「でも、何もしないよりはいい！」

泰智の言葉に、住民たちが動き出す。

サイレンの音が大きくなる。

9. アパート・前（昼）

消防車到着。はしご車ではなく、小型のもの。

耀 「持ってきた！」

耀、大量の布団をどさりと置く。

泰智 「消防に、三階の人が取り残されてるって伝えて！」

耀、うなずく。消防隊員に駆け寄る。

泰智、住民たちと布団を重ね、地面の安全な場所を

確保しようとする。

消防隊員が駆けつける。

消防隊員 「そこは落下地点にしない！」

泰智たち、消防隊員の指示で布団を移動させる。

耀 「泰智！ どうするんだ？」

泰智、三階のベランダを見上げる。

泰智 「まず、赤ちゃんをこっちに渡してもらおう。僕が伸ばした

腕で受け取る」

耀 「お前、届くのか？」

泰智 「届かせる。でも、僕だけじゃ身体を支えられない」

耀、泰智を見る。

泰智 「だから、支えてほしい」

耀、すぐには答えない。

泰智の伸びた腕を見て、うなづく。

耀 「わかった。指示してくれ」

× × ×

泰智、足を踏ん張る。

足首、膝、股関節、背骨、肩、肘、手首。関節が順

に伸び、身体が縦に伸びていく。

耀が泰智の腰を抱え、強化した筋力で支える。

泰智 「もっと右！ 建物に寄せて！」

耀、指示どおり泰智の身体を支える位置を変える。

泰智の腕が二階付近まで届く。

泰智 「ここまでが限界だ……！」

三階の友佳が赤ん坊を抱えて身を乗り出す。

友佳 「この子だけでも！」

泰智 「赤ちゃんを、ゆっくり！」

友佳、赤ん坊を差し出す。

泰智、腕をさらに伸ばす。

手首と肘がギチギチと伸び、指先が赤ん坊に届く。

泰智、赤ん坊を受け取る。

その瞬間、腕が震える。

耀 「よっしゃ！」

泰智、歯を食いしばる。

赤ん坊を落とさないように胸元へ引き寄せる。

泰智 「耀、離れて！」

耀、離れる。

泰智の関節が一斉に縮み始める。

泰智、布団の山へ落下。

耀 「泰智！」

泰智の身体は小学生ほどの大きさになっている。

赤ん坊は泣いているが、無事。

耀、息を吐く。

耀 「お前、すごいな」

泰智 「本に書いてあったから」

泰智、笑いかけて、固まる。

火の手が二階まで到達している。

10. アパート・三階・ベランダ（昼）

友佳、何度も下を覗く。

足がすくんで動けない。

11. アパート・前（昼）

泰智、友佳を見て、耀を見る。

泰智 「僕を投げて」

耀 「は？」

泰智 「ゴール、決めたかったんでしょ」

耀 「冗談も休み休み……」

泰智の真剣な眼差し。

泰智 「今度は、耀が布団で受け止めて」

耀 「そんなの、間に合うか……」

泰智 「耀の力が必要なんだ」

耀、自分の頬を叩き、気合をいれる。

泰智の身体を担ぐ。

耀 「いくぞ」

泰智 「うん」

耀、泰智を全力で投げ上げる。

12. アパート・三階・ベランダ（昼）

泰智、着地。

友佳 「こ、こども？」

泰智 「説明はあとで。逃げますよ！」

二階で爆発音。ベランダが傾く。
泰智 「絶対離さないで！」

と、友佳の手を引く。

ふたり、ベランダから飛び降りる。

13. アパート・前(昼)

耀、ふたりに合わせて布団の山を移動させる。

ふたりの背後で三階が爆発。

爆風により落下予測地点がズレる。

耀 「うおおおお」

耀、ふたりの落下に間に合う。

一瞬の静寂。

友佳、ゆっくり起きあがる。

住民1が友佳に赤ん坊を渡す。

友佳 「ありがとう……」

布団から幼児ほどの小さな拳が出てくる。

耀、それに拳を突き合わせる。

野次馬ら、変わらず撮影している。

14. 高校・教室・内(昼)

幼児サイズの泰智、ノートに何か書いている。

耀、泰智の前の席に座る。

耀 「ミニナム、何してんの？」

泰智 「定規の次はミニナムかよ。今、小説書いてんだから」

耀 「能力使いすぎて小さくなった男の話？」

泰智 「うっさいな。救急隊の話だよ」

同級生 「お前らスゲーな。有名人じゃん」

同級生、スマホを見せる。

ふたりが火災現場で活躍するニュース動画。

同級生 「つか、耀、アカウント消えてね？」

耀 「もういいんだよ」

泰智、微笑む。

(おわり)